

## 流血のテキスト

Nathaniel Hawthorne の “Chiefly about War-Matters” と “Northern Volunteers”

---

藤 村 希

---

Nathaniel Hawthorne (1804-64) は、南北戦争渦中の 1862 年 3 月から 4 月にかけて、首都ワシントンとその周辺を訪れた。この経験をもとに書かれた “Chiefly about War-Matters. By a Peaceable Man” は、さほど長くもない旅行記風の作品ながら、オハイオ州立大学出版によるホーソーン全集の注釈が述べる通り、作家の作品の中でも最も解釈の難しいものの一つと言える (Simpson and Woodson 676)<sup>1</sup>。 *Atlantic Monthly* 誌の同年 7 月号に掲載されたこの作品には、雑誌編集者により本文が一部削除されたかに見える省略記号と注が付されている。この問題含みの形式と、戦下の北部で物議を醸す本文の内容から、「主に戦争問題について」は他に類のない特異な作品として、作家研究のみならず南北戦争に関する作品群の比較研究の側からも、いかに理解すべきかが問われてきた<sup>2</sup>。近年、長らく評価の低かったホーソーンの後期作家経歴、および終結から 150 年となった南北戦争に関わる作品群を再考する二つの新たな関心の下、この作品への注目は高まっている<sup>3</sup>。

その一方で、このワシントン訪問の経験から生まれた作品がもう一つホーソーンにあることは、あまり知られていない。その作品、“Northern Volunteers. From a Journal” は、「主に戦争問題について」の執筆直後に書かれ、作家の地元マサチューセッツ州コンコードの評論雑誌 *Monitor* の同年 6 月 7 日

号に掲載された。短命の地方誌に匿名で発表されたごく短いスケッチは、1988年になって初めて作家のものと同定され、これまで言及されること自体がほとんどなかった<sup>4</sup>。しかし「北部義勇兵」は、同じ経験に基づくにもかかわらず、「主に戦争問題について」と多くの点で非常に異なるものである。この二つのテキストの存在は、互いについて、そしてそれらをほぼ同時に書き上げ発表した作家について、何を明らかにするだろうか。本稿は、この問いにジェンダーの観点から答え、いまだ十分に論じられていないホーソーンの後期作家経歴の一端に光を当てる試みである。

## 1. ホーソーンのワシントン訪問と南北戦争期のアメリカ

ホーソーンが、ワシントンで海軍の衣糧局主計総監の任に当たる大学以来の友人 Horatio Bridge の勧めにより首都訪問を決意するのは、開戦から一年を迎えようとする頃だった<sup>5</sup>。1861年4月12日のサムター要塞攻撃に始まる国家を二分する争いは、大方の予想に反し容易に終結するものとならなかった。初期の大規模な戦闘である7月21日の第一次ブルランの戦いは、南北双方に千五百を超える死傷者を出し南軍の勝利に終わる。それは、自軍の勝利を信じて疑わなかった北部の人々に強い衝撃を与えたが、後に続く凄惨を極める戦いから見れば序の口に過ぎないものだった (McPherson 308-50)。ホーソーンがコンコードの自宅を発ち、編集者 William D. Ticknor とともに鉄道でワシントンに到着したのは3月10日。前日には、ヴァージニア州南東のハンプトンローズで、北部の Monitor 号と南部の Merrimack 号が史上初の装甲艦同士の戦闘を繰り広げたばかりだった。以後、4月10日に帰宅するまでの一か月間、作家はホワイトハウスに共和党の Abraham Lincoln 大統領を訪ねるマサチューセッツ州の代表団に加わり、ブルランの戦いの地マナサスを訪れ、首都近郊のフェアファクスに北軍総司令官 George McClellan と彼の率いる Potomac 軍を訪ね、モンロー砦でモニター号を見学し、ハーパーズフェリーでは、59年に奴隷制廃止論者の John Brown が襲撃して絞首刑となった連邦武器庫が今や南軍捕虜収容所となっているのを目撃する——といった具合に、戦下の状況を自らの目で見ることとなる。

この戦時のアメリカを統轄する大統領リンカーンの基本方針を一言でまとめるならば、「連邦解体 (disunion) を防ぐこと」と言える (Johnson 71)。60年12月のサウスカロライナに始まる南部11州の連邦離脱を認めず、あくまで一

国内の「反乱」とする見解を貫いた大統領にとって、何より重要だったのは、これを鎮圧して南部の独立を阻止することだった。連邦維持と首都防衛のためには手段を選ばない、その強硬な態度が鮮明となるのが、開戦後まもなく決定されたメリーランド州における人身保護令状の停止である。違法な逮捕・拘束を防ぐ人身保護令状を請求する権利は、合衆国憲法第1条第9節で、非常事態を除き停止を禁じられている。首都を囲む奴隷州メリーランドが南軍に付くことを恐れたリンカーンは、法律家たちの批判を抑え、法と法が守る個人の権利よりも国家の存続が優先されねばならないと訴えた。この令状の停止は、「反乱」に関与すると疑われる人々を、司法上の手続きを経ず逮捕し長期に拘束することを可能にしたのである（McPherson 287-89）。

そのようななか、人々を愛国者と叛逆者、善と悪とに峻別する、抑圧的な風潮が生まれることは想像に難くない。その分かりやすい一例となるのが、マクレランに対する評価である。ブルランでの大敗後、高齢の Winfield Scott に代わる北軍総司令官として抜擢された若い将軍は、陸軍士官学校の優秀な卒業生と期待されながら、訓練に明け暮れ実戦に移れないまま半年が過ぎようとする、野党民主党を支持し奴隷制を容認するその政治的態度から、南部と通じた叛逆者と声高に非難されるようになるのだ（Woodworth n. pag）。こうした風潮は、「主に戦争問題について」が発表される『アトランティック』の誌面にも明らかな。例えば、61年7月号の John Hay による“Ellsworth”は、首都からポトマック川を隔てた対岸アレクサンドリアの宿屋に掲げられた南部連合旗を奪って射殺され、大統領本人からも北軍初の戦死者として悼まれた Elmer Ellsworth を称える一方、彼を撃った宿屋の主人——エルズワースの仲間によってその場で射殺されたのだが（Kagan 32）——の残虐を非難し、北部の自由と南部の奴隷制の典型と描く（Hay 125）。また、62年2月号の Julia Ward Howe の詩“Battle Hymn of the Republic”は、ジョン・ブラウンを神の戦士として英雄化し北軍兵士の間で広く歌われた“John Brown's Body”をもとに<sup>6</sup>、人間を罪から解放するキリストに北部を重ね、蛇に擬えた南部を踏み潰せとうたう（145）。アメリカにおける雑誌の歴史を研究した Frank Luther Mott は、『アトランティック』に版元 Ticknor and Fields 社の地元ボストンにおける奴隷制廃止運動の影響が色濃く見られることを指摘している（496-500）。

一方、ホーソーンは、このような『アトランティック』の傾向に強い危惧を抱いていた。「主に戦争問題について」発表準備中の5月17日、作家はティクナーに宛てた手紙で友人が発行するこの雑誌に触れ、次のように批判している

—— “I think the political complexion of the Magazine has been getting too deep a black Republican tinge, and that there is a time pretty near at hand when you will be sorry for it. The politics of the Magazine suit Massachusetts tolerably well (and only tolerably) but it does not fairly represent the feeling of the country at large” (XVIII: 457)。ホーソーンが、奴隷解放に賛成する北部の共和党支持者を指す「黒い共和党员」の党派的な善悪二元論とは異なる見解をもち、「国全体の感情」に意識的であったことは、イギリスの友人 Francis Bennoch に宛てた次の手紙に見て取ることができる。

... we seem to have little, or, at least, a very misty idea of what we are fighting for. It depends upon the speaker, and that, again, depends upon the section of the country in which his sympathies are enlisted. The Southern man will say, We fight for state rights, liberty, and independence. The middle and Western states-man will avow that he fights for the Union; whilst our Northern and Eastern man will swear that, from the beginning, his only idea was liberty to the Blacks, and the annihilation of slavery. All are thoroughly in earnest, and all pray for the blessing of Heaven to rest upon the enterprise. The appeals are so numerous, fervent, and yet so contradictory, that the Great Arbiter to whom they so piously and solemnly appeal, must be sorely puzzled how to decide. (XVIII: 387)

ホーソーンは、人々が地域ごとに戦争に対して異なる見解をもち、しかもそれらが互いに相容れないものであることを、俯瞰的に理解しているのである。それは、南北戦争がいよいよ避け難くなる 1850 年代後半以降、作家が度々書き記す、自分には属する党派がないという言葉とも通底する<sup>7</sup>。ホーソーンが「主に戦争問題について」、そして「北部義勇兵」を書いたのは、このような状況においてだった。

## 2. 「平和主義の男」の使命

「主に戦争問題について」は、本稿冒頭でも触れたように、本文と注からなる独特の形式で書かれている。この注は、『アトランティック』の編集者によるものと誤解されることも度々あったものの、ホーソーン自身によって書かれ

たものである。1989年の論考で、これを当時出版準備中だった作家晩年の手紙から跡付けた James Bense は、「主に戦争問題について」を作家が言論の自由の重要性を示すために検閲を模して書いた “censorship hoax” であると論じた(200)。本稿はこの主張に大筋で同意するものの、ベンスが問うことのなかった本文と注の関係がはらむジェンダーの問題に注目して作品を再考する。この問題は、「主に戦争問題について」の執筆に際して作家を深く捉えていたものなのである。

ホーソーンは、1862年5月7日に「主に戦争問題について」の第一稿を『アトランティック』の編集長 James T. Fields に送った際、手紙に次のように書いた—— “You will see that I have affixed some editorial foot-notes, which I hope you will have no hesitation in adopting, they being very loyal. For my own part, I found it quite difficult not to lapse into treason continually; but I made manful resistance to the temptation” (XVIII: 455)。ここで作家は、自ら付けた注が「忠節を示す」ものであるのに対して、本文では「叛逆」に陥らないよう「男らしい抵抗」を行ったと述べる。とともに、“I am afraid it will prove a stupid affair” と続け、このような作品の企図に対する不安も吐露しているのである (XVIII: 455)。この十日後、先にも一部引用したティクナーへの手紙では、“I have already half-spoilt it by leaving out a great deal of spicy description and remark, and whole pages of freely expressed opinion, which seemed to me as good as anything I ever wrote, but which I doubted whether the public would bear” と告白した上で、作家は “I don’t think it will bear any more castration” と述べ、本文削除を「去勢」と呼んでいる (XVIII: 457)。これらに見られる男性性の言説は、「主に戦争問題について」における本文と注の関係が、ホーソーンの二つのペルソナ——本文の語り手である作品タイトルの「平和主義の男」と、本文を削除し注を付ける「編集者」——の間の、男性同士のジェンダー・ポリティクスとして想像されていることを浮かび上がらせる。前者の「男らしい抵抗」と、後者の「去勢」の間の力学は、この作品において何を達成しているのだろうか。

では、その力学の働く現場を見てみよう。以下は作中最初の注が付された箇所である。

It is natural enough to suppose that the centre and heart of Washington is the Capitol; and certainly, in its outward aspect, the world has not many statelier or more beautiful edifices, nor any, I should suppose, more skilfully

adapted to legislative purposes, and to all accompanying needs. But &c &c.\*

.....

\* We omit several paragraphs here, in which the author speaks of some prominent members of Congress with a freedom that seems to have been not unkindly meant, but might be liable to misconstruction. As he admits that he never listened to an important debate, we can hardly recognize his qualification to estimate these gentlemen, in their legislative and oratorical capacities. (XXIII: 408)

この一節において、「平和主義の男」は連邦議会議事堂に言及し、その首都の中心としての機能が表面的なものであり、実体を伴ってはいないことを示唆している。「しかし」と逆接で導入されたはずの彼の批判的描写は「編集者」によって削除され、アステリスクに続く注では、リンカーン政権下の議員たちに関する「平和主義の男」の見解の「自由さ」が批判されるのみならず、議員に評価を下す彼の「資格」自体が疑問に付されるのである。

また、ジョン・ブラウンに関する別の一節では、その絞首刑による死を“made the Gallows as venerable as the Cross!”と熱狂的に称賛した人のいることに言及しながら、「平和主義の男」自身はブラウンを“this blood-stained fanatic”と呼び、その死を“Nobody was ever more justly hanged”と切り捨てる。それに対して「編集者」の注は、“Can it be a son of old Massachusetts who utters this abominable sentiment? For shame!”と、ブラウン称賛者の熱狂を共有しつつ、「平和主義の男」が「由緒あるマサチューセッツの息子」であることを強く否定するのである (XXIII: 427)。ここで引用されるブラウン称賛者の言葉とは、Ralph Waldo Emerson の講演“Courage” (1859) の一節、“Look at that new saint . . . awaiting his martyrdom, . . . who, if he shall suffer, will make the gallows glorious like the cross”に基づいている (Simpson and Woodson 692)。ブラウンを「聖者」にまで高める見方は、先に言及した「ジョン・ブラウンの遺骸」や「リパブリック賛歌」にも見られたものだが、David S. Reynolds によれば、このエマソンの講演の一節こそが、北部の人々に広く共有された「殉教者」としてのブラウン像形成に大きく寄与するとともに、それに批判的な人々との間の対立を一層深める要因となったものだった (363-69)<sup>8</sup>。

これら「主に戦争問題について」の注から明らかになる「編集者」とは、現実の『アトランティック』の編集長フィールズ個人ではなく、この雑誌が肩入

れしているとホーソーンが批判したもの——すなわち、前節で確認した「黒い共和黨員」の見解を模しているのだと言える。「編集者」が擁護し代弁するものの核にあるのは、「平和主義の男」が“the man of men”と呼ぶ大統領リンカーンの体制にほかならない (XXIII: 411)。一方、「平和主義の男」の見解は、この「黒い共和黨員」の見解と対立することでそれを相対化し、「国全体の感情」を代表するものとなるよう意図的にまとめられている。このために、「マサチューセッツの息子」である彼の北部の男性性は否定される。しかし、それこそが「男の中の男」の体制を批判するために「平和主義の男」が採った手段なのだ。ここで注目すべきは、「平和主義の男」が特に強調して描写する、贈られた鞭を手にするリンカーンの姿である。この鞭は、“the gift was a suggestive and emblematic one”と述べられるように (XXIII: 414)、肉体への暴力の象徴として、殊に同時代の文脈では奴隷制の換喩となることは言うまでもない。と同時に、それはリンカーンが手によって、その指揮下に進行中の南北戦争の暴力も示唆するものとなる。つまりここで、奴隷制の暴力と、戦争の暴力とが、等価に結ばれるのである。それだけではない。作品冒頭における King Charles への言及は、イギリスの“Civil War”であるピューリタン革命の時代のチャールズ一世の絶対王政と、アメリカの“Civil War”である南北戦争の現下のリンカーンの体制とを、アナロジーで結ぶのである (XXIII: 403)。それは、人身保護令状の停止されるアメリカ、「黒い共和黨員」の党派的な善悪二元論の下で自由な見解が抑圧されるアメリカにほかならない。この「男の中の男」の体制の暴力——ベンスの指摘した検閲はその一部にすぎない——を可視化するためにこそ、「平和主義の男」は「編集者」による「去勢」を引き受けるのである。

こうして「平和主義の男」は、「黒い共和黨員」とは対立的な見解を繰り広げる。マクレランを叛逆者だとする非難に対しては、指揮下の兵士たちの将軍への信頼を描写し、“If he is a coward, or a traitor, or a humbug, or anything less than a brave, true, and able man, that mass of intelligent soldiers, whose lives and honor he had in charge, were utterly deceived, and so was this present writer”と述べる (XXIII: 424)。また、人種問題に関しては、奴隷解放を訴える奴隷制廃止論者たちも多くの場合人種間の平等については否定的だったのに対し、「平和主義の男」は、“Africans of Virginia”が“children of the Puritans”と同じメイフラワー号の胎から生まれた“our brethren”だとするのである (XXIII: 420)<sup>9</sup>。奴隷制廃止論者たちが、この制度の悪を熱烈に訴えながら制度廃止後の人種問題について現実的な議論をすることは稀だったのに対し、「平和主義の男」は、

“whoever may be benefitted by the results of this war, it will not be the present generation of negroes, the childhood of whose race is now gone forever, and who must henceforth fight a hard battle with the world, on very unequal terms” と述べ、黒人の苦境を想像する (XXIII: 420)。それが奴隷解放の後、戦後の南北和解の後にも長く続く現実であることは、David W. Blight が “as the sections reconciled, by and large, the races divided” と述べた通りである (4)。さらに、連邦と首都の中心に関しては、次のような考察が展開される。

This hotel . . . may be much more justly called the centre of Washington and the Union, than either the Capitol, the White House, or the State Department. Everybody may be seen there. It is the meeting-place of the true representatives of the country, not such as are chosen blindly and amiss by electors who take a folded ballot from the hand of a local politician, and thrust it into the ballot-box unread; but men who gravitate or are attracted hither by real business, or a native impulse to breathe the intensest atmosphere of the nation's life, or a genuine anxiety to see how this life-and-death struggle is going to deal with us. Nor these only, but all manner of loafers. Never, in any other spot, was there such a miscellany of people. (XXIII: 438)

この一節が、先に見た連邦議会議事堂の描写と対になっていることは明白である。国家の政治の舞台が首都の表向きの中心でしかなく、その描写も「編集者」により削除されていたのに対し、ここで語られる Willard's Hotel は、不正な方法で選ばれた代議士ではなく、国家を真に代表すると言えるあらゆる種類の人々の存在ゆえに、連邦の中心と呼ぶに相応しいものとされている。そこには、“elderly men with frilled shirt-fronts” と、“half-a-century ago” に廃れたという服装の老人たちも現れる (XXIII: 439)。“It is as if one of Stuart's portraits were walking abroad” と語られる老人の姿は、アメリカ独立期の画家 Gilbert Stuart による建国の父たちの肖像画、なかでも有名な George Washington 像を想起させるものである。“I see no way of accounting for this, except that the trouble of the times, the impiety of traitors, and the peril of our sacred Union and Constitution, have disturbed, in their honored graves, some of the venerable fathers of the country, and summoned them forth to protest against the meditated



and half-accomplished sacrilege”という「平和主義の男」の想像は、リンカーンの体制の下で「連邦と憲法」がまさに危機に瀕しており、それゆえに連邦議会議事堂がもはや建国の父たちの理念を引き継ぐ場とはなっていないことを示唆するのである (XXIII: 439)。

このような「平和主義の男」を、「主に戦争問題について」の冒頭は次のように描く。

There is no remoteness of life and thought—no hermetically sealed seclusion, except, possibly, that of the grave—into which the disturbing influences of this war do not penetrate. Of course, the general heartquake of the country long ago knocked at my cottage-door, and compelled me, reluctantly, to suspend the contemplation of certain phantasies, to which, according to my harmless custom, I was endeavoring to give a sufficiently lifelike aspect to admit of their figuring in a Romance. As I make no pretensions to state-craft or soldiership, and could promote the common weal neither by valour nor counsel, it seemed, at first, a pity that I should be debarred from such unsubstantial business as I had contrived for myself, since nothing more genuine was to be substituted for it. But I magnanimously considered that there is a kind of treason in insulating one's self from the universal fear and sorrow, and thinking one's idle thoughts in the dread time of civil war . . . (XXIII: 403)

「平和主義の男」は、ロマンス作家として空想に耽ることを習わしとし、政治や戦争への適性をもたない。しかし、南北戦争の影響が祖国を覆う中ひとり空想の内に孤立することは、彼には「叛逆」としか思えない。ここで「叛逆」とは、連邦への叛逆というこの時代の一般的な意味ではなく、戦下の「万人共通の恐怖と悲哀」に応答せずにいることなのである。「平和主義の男」の使命とは、この「叛逆」に「男らしい抵抗」を果たすため、「編集者」による「去勢」を引き受けたテキストによって「男の中の男」の体制の暴力を浮き彫りにすることにほかならない。そのリンカーンの描写には、Grace E. Smith の言う“satire”に留まらない政治的な意図が込められている (150)。Edward Wesp は、「主に戦争問題について」をホーソーンのロマンスの終焉を示す作品と論じた (424-26)。むしろ、ホーソーンが二つのペルソナ間の力学として作り上げたこ

の作品は、*The Scarlet Letter* (1850) 序章で作家が規定した、“the Actual” と “the Imaginary” の相まみえる “a neutral territory” にひらかれるロマンスの系譜に連なる作品である (I: 36)。Charles Swann はこの作品について、“The poise, the wit, the multi-layered irony, the excellent journalistic eye—all show a writer magnificently in control of his materials” と評価した (182)。「主に戦争問題について」は、ロマンス作家ホーソンだからこそなし得た戦争批判であり、作家晩年の力量を示す作品だった。

### 3. 「北部義勇兵」と「我々」と語る語り手

しかし、「主に戦争問題について」は、ホーソンが当初意図した形では発表されなかった。1862年5月23日のホーソンのフィールズへの手紙は、作家が『アトランティック』の編集長から要請されたリンカーンに関する記述の修正に従う代わりに、この記述の大部分を削除したことを明らかにしている<sup>10</sup>。フィールズは後年、ホーソンとリンカーンがともに世を去って久しい71年4月の『アトランティック』誌上で、ホーソンの回想とともに作家によって削除されたリンカーンの描写を掲載し、“I venture to-day what I hardly dared then” と述べて、62年当時の言論をめぐる抑圧がいかにどのものであったかを伝えるのである (512)。実際ホーソンは、62年5月17日のティクナー宛手紙で、“I shall be known as the author, and should be willing to take the responsibility of much worse things than I have written here” と述べ、同時代の状況を十分に理解したうえで、「主に戦争問題について」発表の結果起こり得る全てに自ら責任を負う覚悟を表明していた (XVIII: 457)。ホーソンが「北部義勇兵」を『モニター』に投稿したのは、「主に戦争問題について」の修正稿をフィールズに送った四日後の5月27日だった (Simpson and Woodson 692)。

『モニター』は、62年4月19日の愛国記念日に創刊され、北部の装甲艦モニター号に表題をちなむことから容易に想像できるように、北部愛国的な評論雑誌だった (Simpson and Woodson 694)。匿名による投稿と掲載を旨とするコンコードの小雑誌は、創刊からわずか二か月後の6月21日付第8号で廃刊となった。「北部義勇兵」は、6月7日発行の第7号に掲載される。この短いスケッチは、同じワシントン訪問の経験をもとに書かれた「主に戦争問題について」と大きく異なり、Rita Gollin が “fervently partisan” と述べる通り (171)、

南部の野蛮さと北部のモラルの高さを明からさまに對置させて描くものなのである。

「北部義勇兵」において、ホーソーンはこの南北の對比を双方のジェンダー観の相違として展開する。作家が“something so grotesquely hideous in the Southern character”と呼ぶものは、北部兵の頭蓋骨を杯にして男性と酒を回し飲みし、人骨を装身具として身に付けもすると描かれる、南部女性によって説明される (XXIII: 443)。これに対して、“homely courtesy of these Northern soldiers”と述べられる北部兵士のモラルの高さは、“They carried their home in their hearts, and remembered that they had women for their mothers and sisters”と、戦場にあっても家庭やそこに残る母や姉妹を忘れずにいることと結び付けられている (XXIII: 444-45)。南北戦争の大衆表象を研究した Alice Fahs は、この時代の家庭崇拜の言説を背景に、感傷的な大衆文学において、家庭——特に母——を切望する兵士が理想的な男性のあり方として繰り返し描かれたことを明らかにしている (106)。「北部義勇兵」は、この大衆的な南北戦争表象に倣うものと言える。さらにこの作品では、北部兵士たちが“John Brown’s anthem”を歌う姿も好意的に描かれており (XXIII: 444)、ブラウンの絞首刑を「正当」なものと切り捨てる「主に戦争問題について」とは対照的に、「リパブリック賛歌」や「ジョン・ブラウンの遺骸」におけるブラウン称賛にむしろ近い作品であることを浮かび上がらせる。

この「主に戦争問題について」と「北部義勇兵」の差異を、いかに考えるべきだろうか。——「主に戦争問題について」には、その答えとなる以下のような一節がある。

It is a strange thing in human life, that the greatest errors both of men and women often spring from their sweetest and most generous qualities; and so, undoubtedly, thousands of warm-hearted, sympathetic, and impulsive persons have joined the rebels, not from any real zeal for the cause, but because, between two conflicting loyalties, they chose that which necessarily lay nearest the heart. There never existed any other government, against which treason was so easy, and could defend itself by such plausible arguments, as against that of the United States. The anomaly of two allegiances (of which that of the State comes nearest home to a man’s feelings, and includes the altar and the hearth, while the General

Government claims his devotion only to an airy mode of law, and has no symbol but a flag) is exceedingly mischievous in this point of view; for it has converted crowds of honest people into traitors, who seem to themselves not merely innocent, but patriotic, and who die for a bad cause with as quiet a conscience as if it were the best. (XXIII: 416)

ここで述べられる、国家と州に対する「二つの相対立する忠誠心」とは、連邦に反旗を翻す南部への理解であるだけでなく、「主に戦争問題について」と「北部義勇兵」という二つのテキストの説明でもあるのではないか。「主に戦争問題について」は、「国全体の感情」を代表することをその目的としていた。しかしそれは、「平和主義の男」の北部の男性性を「去勢」することで成り立っていた。一方「北部義勇兵」は、そのために犠牲にされた北部の男性性と愛国心とを、語り手が北部兵士たちを“*Our own army*”と一人称複数で呼ぶことで、自らのものとして取り戻そうとするのである (XXIII: 444)。ホーソーンは、この国家と州への相矛盾する感情を、早くも 1858 年の時点で示していた——“I wonder that we Americans love our country at all, it having no limits and no oneness; and when you try to make it a matter of the heart, everything falls away except one's native State;—neither can you seize hold of that, unless you tear it out of the Union, bleeding and quivering” (XIV: 463)。語りかける相手のないノートブックの中で、ホーソーンはひとり、「私」「あなた」「我々」に分裂し、その間で揺れている。「私」は、分裂する祖国への「我々アメリカ人」の愛を疑い、「あなた」が心に忠実であろうとすれば生まれ育った州以外を切り捨てねばならないことを認めている。しかし、“Yet unquestionably we do stand by our national flag as stoutly as any people in the world” と続けることで、それらの思いを「疑いなく」の一語の下に封じ込め、国旗への忠誠を誓おうとするのである (XIV: 463)。祖国から自らと血の通い合うものを切り離して取り戻そうとするとき、鮮血を流して身を震わせるのは、国家と州という彼の二つの故郷であると同時に、その双方と深く繋がるホーソーン自身でもあるのだ。

前節冒頭で確認した通り、ホーソーンは「主に戦争問題について」の第一稿を送った際、フィールズへの手紙に不安を吐露していた。しかし、その不安を押しでも「国全体」のために語られなければならないと彼が考えたのが「主に戦争問題について」という作品であり、そのように考えるのがホーソーンという作家であった。その目的のために犠牲にされた、自らの北部の男性性を救

う極めて個人的な目的のために、「北部義勇兵」は「主に戦争問題について」から切断され、匿名という形で発表されねばならない作品だった。

#### 4. 流血のテキスト

「主に戦争問題について」は、『アトランティック』の「黒い共和党员」への偏向を批判し、「国全体の感情」を代表することを目的として書かれた作品だった。南部に理解と共感を示す「平和主義の男」による本文と、『アトランティック』の編集者を模した「編集者」による本文削除と注の並記から成る作品は、この「編集者」が支持する「男の中の男」リンカーンの戦時体制下の抑圧を、「平和主義の男」の「去勢」として可視化するテキストである。それは、ホーソンが北部への愛国心と北部の男性性を自ら殺ぐことによってかろうじて成立するものだった。一方、同時代の家庭崇拜という大衆的な言説を用いた「北部義勇兵」は、語り手が「我々」という一人称複数を用いることで、描かれる北軍兵士たちと同じ北部の男性性を共有し、「主に戦争問題について」において目的を達成するために切り捨てられたものを回復しようとする。ホーソンは、その作家経歴の始めには、共同体の規範を体現する「父」の下で葛藤する若者の逸脱感を基点として作品を書いたが、「主に戦争問題について」においては、その逸脱をこそ体制批判の手段として用いるという作家としての発展を示している。しかし、それは「北部義勇兵」との比較が浮き彫りにするように、彼に大きな心理的負荷を強いるものでもあった。二つに引き裂くことで漸く一つの作品となし得た流血のテキスト「主に戦争問題について」と「北部義勇兵」とは、作家ホーソンが晩年に至った境地を照らし出すものなのである。

#### 註

本稿は、2012年12月15日に開催された立教英米文学会における発表原稿「ナサニエル・ホーソンの南北戦争——“Chiefly about War-Matters”を読む」に大幅な加筆修正を施したものである。学会に講師としてお招きくださった立教大学文学部文学科英米文学専修の先生方、発表にご意見をお寄せくださった方々に、この場を借りて心よりお礼申し上げたい。なお、本稿は科学研究費補助金により援助を受けた研究成果の一部である。

- <sup>1</sup> ホーソーンの引用は全てオハイオ州立大学版全集により、括弧に巻：頁の順に示す。
- <sup>2</sup> 例え、Fredrickson は “the only notable writer or thinker who took a detached and critical view of the Union cause” とみなすホーソーンのこの作品を “unique” と呼び (2)、Aaron は “one of the most curious War documents written by an American man of letters” と述べている (49)。
- <sup>3</sup> 一例として、Finseth、Fuller 34-51、L. Reynolds, *Devils* 217-43、*Righteous* 156-81、Riss 136-63、Trninic、Wespを参照。
- <sup>4</sup> 「北部義勇兵」の作者同定の経緯は、Simpson and Woodson 692 参照。この作品を収録したオハイオ州立大学版全集第 23 巻以外でこれに言及したものは、管見の及ぶ限り、Gollin、L. Reynolds, *Devils*、Trninic、Wineapple のみである。Gollin は、後に言及するようにこの作品が「主に戦争問題について」と異なることに注目するものの、半ページに満たないごく短い言及の中で作品の十分な考察を行っていない (171)。また Reynolds は、これが南部人の “demonization” を行った作家唯一の作品であると述べるに留まっている (*Devils* 226)。一方、Trninic と Wineapple は、「主に戦争問題について」と「北部義勇兵」の両作品が暴力への批判を共有することを、短い記述の中で言及している (Trninic 124、Wineapple 351-52)。
- <sup>5</sup> 以下、ホーソーン的首都訪問の概要は、Simpson and Woodson 676-92 参照。ブリッジのワシントンでの海軍勤務に関しては、Simpson and Woodson 677-78、Wineapple 347 参照。
- <sup>6</sup> 複数の版がある “John Brown’s Body” の代表的なものとして、Browne 166-67 参照。
- <sup>7</sup> これに類する言葉は、例えば、XVII: 559、XVIII: 355-56、543、589-92 等に見られる。
- <sup>8</sup> Reynolds は、「主に戦争問題について」の「平和主義の男」の見解をホーソン自身のものとみなし、“Hawthorne had little sympathy for blacks” と批判する (D. Reynolds 448)。しかし、「平和主義の男」の見解はそのまま作家個人のものとするのはできず、またその黒人に対する見解も、本稿が以下で論じる通り Reynolds が述べるほど単純なものではない。
- <sup>9</sup> Bentley や Riss は、この作品で “fauns” と喩えられる逃亡奴隷をもとに (XXIII: 420)、*The Marble Faun* (1860) の Donatello を黒人奴隷の表象と解釈している。同様に、“one burning drop of African blood” をもつと噂される Miriam と、

“daughter of the Puritans”である Hilda の “sisters”としての関係も (IV: 23, 54, 207)、ここで展開されるピューリタンとアフリカ人が “brethren” だとする見解と繋がるものだと言えよう。Bentley 24-67、Riss 136-63、藤村参照。

<sup>10</sup> オハイオ州立大学版全集収録の作品は、作家の第一稿に基づくものである。『アトランティック』掲載版との相違は、この手紙の注 (XVIII: 462) 及び Hawthorne, “Chiefly” 参照。

### 引用文献

- Aaron, Daniel. *The Unwritten War: American Writers and the Civil War*. 1973. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2003. Print.
- Bense, James. “Nathaniel Hawthorne’s Intention in ‘Chiefly about War Matters.’” *American Literature* 61.2 (1989): 200-14. Web. 18 Aug. 2005.
- Bentley, Nancy. *The Ethnography of Manners: Hawthorne, James, Wharton*. Cambridge: Cambridge UP, 1995. Print.
- Blight, David W. *Race and Reunion: The Civil War in American Memory*. Cambridge: Harvard UP, 2001. Print.
- Browne, C. A. *The Story of Our National Ballads*. 1919. New York: Crowell, 1960. Print.
- Fahs, Alice. *The Imagined Civil War: Popular Literature of the North and South, 1861-1865*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001. Print.
- Fields, James T. “Our Whispering Gallery.” *Atlantic Monthly* 27 (Apr. 1871): 504-12. *Making of America*. Web. 24 Nov. 2012.
- Finseth, Ian Frederick. “Introduction: The Written War.” *The American Civil War: An Anthology of Essential Writings*. New York: Routledge, 2006. 3-15. Print.
- Fredrickson, George M. *The Inner Civil War: Northern Intellectuals and the Crisis of the Union*. With a New Preface. Urbana: U of Illinois P, 1993. Print.
- Fuller, Randall. *From Battlefields Rising: How the Civil War Transformed American Literature*. New York: Oxford UP, 2011. Print.
- Gollin, Rita K. “Estranged Allegiances in Hawthorne’s Unfinished Romances.” *Hawthorne and the Real: Bicentennial Essays*. Ed. Millicent Bell. Columbus: Ohio State UP, 2005. Print. 159-80.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.

- 23 vols. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1962-97. Print.
- Vol. I, *The Scarlet Letter*. 1962.
- Vol. IV, *The Marble Faun*. 1968.
- Vol. XIV, *The French and Italian Notebooks*. 1980.
- Vol. XVII, *The Letters, 1853-1856*. 1987.
- Vol. XVIII, *The Letters, 1857-1864*. 1987.
- Vol. XXIII, *Miscellaneous Prose and Verse*. 1994.
- . “Chiefly about War-Matters. By a Peaceable Man.” *Atlantic Monthly* 10 (Jul. 1862): 43-61. *Making of America*. Web. 18 Nov. 2012.
- Hay, John. “Ellsworth.” *Atlantic Monthly* 8 (Jul. 1861): 119-25. *Making of America*. Web. 24 Nov. 2012.
- Howe, Julia Ward. “Battle Hymn of the Republic.” *Atlantic Monthly* 9 (Feb. 1862): 145. *Making of America*. Web. 24 Nov. 2012.
- Johnson, Michael P., ed. *Abraham Lincoln, Slavery, and the Civil War: Selected Writings and Speeches*. 2nd ed. Boston: Bedford, 2011. Print.
- Kagan, Neil, ed. *Atlas of the Civil War: A Comprehensive Guide to the Tactics and Terrain of Battle*. Washington: National Geographic, 2009. Print.
- McPherson, James. *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era*. New York: Oxford UP, 1988. Print.
- Mott, Frank Luther. “The Atlantic Monthly.” *A History of American Magazines*. Vol. 2, 1850-1865. Cambridge: Harvard UP, 1966. 493-515. Print.
- Reynolds, David S. *John Brown, Abolitionist: The Man Who Killed Slavery, Sparked the Civil War, and Seeded Civil Rights*. New York: Vintage, 2005. Print.
- Reynolds, Larry J. *Devils and Rebels: The Making of Hawthorne’s Damned Politics*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2008. Print.
- . *Righteous Violence: Revolution, Slavery, and the American Renaissance*. Athens: U of Georgia P, 2011. Print.
- Riss, Arthur. *Race, Slavery, and Liberalism in Nineteenth-Century American Literature*. 2006. Cambridge: Cambridge UP, 2009. Print.
- Simpson, Claude M., and Thomas Woodson. “Historical and Textual Commentary.” Hawthorne, XXIII 551-705.
- Smith, Grace E. “‘Chiefly about War Matters’: Hawthorne’s Swift Judgment of Lincoln.” *ATQ* 15.2 (2001): 149-61. Print.



- Swann, Charles. *Nathaniel Hawthorne: Tradition and Revolution*. Cambridge: Cambridge UP, 1991. Print.
- Trninic, Marina. "A Call to Humanity: Hawthorne's 'Chiefly about War-Matters.'" *Nathaniel Hawthorne Review* 37.1 (2011): 109-32. Print.
- Wesp, Edward. "Beyond the Romance: The Aesthetics of Hawthorne's 'Chiefly about War Matters.'" *Texas Studies in Literature and Language* 52.4 (2010): 408-32. Web. 5 Apr. 2015.
- Wineapple, Brenda. *Hawthorne: A Life*. New York: Knopf, 2003. Print.
- Woodworth, Steven E. "McClellan, George B." *American National Biography Online*. 2000. Web. 26 Nov. 2012.
- 藤村希「未完の再生——『大理石の牧神』のホーソー後期作家経歴における意義」『英文学研究』第92巻, 2015. 41-59.

## Bleeding Texts:

Nathaniel Hawthorne's "Chiefly about War-Matters" and "Northern Volunteers"

---

Nozomi Fujimura

---

This paper reconsiders Nathaniel Hawthorne's "Chiefly about War-Matters. By a Peaceable Man" along with his "Northern Volunteers. From a Journal." "Chiefly about War-Matters" has long been recognized as one of the most unique writings on the American Civil War. Meanwhile, "Northern Volunteers" has received little attention and remains largely unknown, due to the fact that it was published anonymously and not identified as one of Hawthorne's works until 1988. Written soon after Hawthorne's visit to Washington from March to April 1862, both works are based on his first-hand observation of wartime America. However, they are markedly different from one another. In this paper, by paying close attention to these differences, I attempt to shed new light on these works as well as on Hawthorne in his later career from the viewpoint of gender.

"Chiefly about War-Matters," published in the July 1862 issue of the *Atlantic Monthly*, is considered one of the most difficult works to interpret among Hawthorne's. It has been recognized for its uniqueness among Civil War literature based on two characteristics: firstly, its ellipses and footnotes, which appear to have been censored by the magazine editor, but were actually written by the author himself; and secondly, its provocative views that were friendly to the South

and therefore unpopular in the North, especially among abolitionists. Hawthorne intended "Chiefly about War-Matters" as a critique of the magazine's strong "black Republican" tendency and hoped that his work would represent the whole nation. In this work, Hawthorne creates two personae as a "Peaceable Man" and an "editor." Through the interaction between the former's "manful resistance" and the latter's "castration," the author illuminates what he regards as the repressive and violent regime of "the man of men," namely, Abraham Lincoln, and questions the easy dualism that was prevalent among Northern abolitionists, which created a sharp distinction between patriots and traitors.

"Northern Volunteers" is a short sketch published in the June 7, 1862 issue of the Concord *Monitor*. First published on Patriots' Day and named after the Northern ironclad, *Monitor*, this short-lived local review was clearly supportive of the Northern cause and held to its principle of keeping its contributors anonymous. In the sketch, Hawthorne presents a strongly partisan view of Northern civility and Southern grotesqueness by utilizing a contemporary popular discourse known as the cult of domesticity. By employing the first person plural "we," Hawthorne identifies himself with the Northern volunteers and, by doing so, attempts to reclaim his Northern manhood, which his objectives of "Chiefly about War-Matters" have propelled him to sacrifice. These divided texts illuminate an author who is divided between the two allegiances to his nation and his native state, allegiances that the Civil War has made incompatible. The two texts also reveal how Hawthorne as a Romance writer acted in the face of a deeply divided nation and how much psychological involvement it required of him.